

留学・研究計画書

氏名 安中 茉美	留学機関名 ソウル大学校
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2008年9月～2009年8月
研究テーマ 植民地期における朝鮮工芸美術の位置付け—浅川巧の評価を中心として—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	

研究目的は、植民地期における朝鮮工芸美術の価値が日本人である浅川巧によってどのように発見され、どのような視線を向け、そして朝鮮内における評価につながっていったのかを明らかにすることである。

日本による植民地時代において朝鮮の工芸美術を評価した浅川巧(あさかわたくみ)という人物がいる。浅川巧は日本による朝鮮植民地期において、朝鮮人の生活に馴染み朝鮮を理解した日本人と言われている。

1910年、日本による韓国併合の頃、巧の兄である伯教(のりたか)が朝鮮の陶磁器に出会いその美しさに感動する。当時の日本人が、朝鮮のものを遅れたもの、あるいは中国の垂流と見ていた中、伯教は朝鮮の陶磁器に朝鮮独特の美を見出し朝鮮に渡る。朝鮮の陶磁器は、青磁が価値のあるものとして世界的に賞賛的となっていたため値段が高かったのだが、伯教はそれよりも庶民が用いる白磁の美しさに魅せられた。後に伯教は李朝陶磁器史の時代区分をし、「朝鮮古陶磁器の神様」と知られたが、その影には熱心に窯跡巡りや骨董屋巡りをした巧の協力があった。

巧も兄を追って朝鮮に渡り、朝鮮総督府山林課で養苗専門家として林業的な業績を挙げたほかに朝鮮の美の研究として、李朝家具についての『朝鮮の膳』(1929年)やまた『朝鮮陶磁名考』(1931年)をはじめとする優れた研究結果を残した。これらの著書は日本人、朝鮮人を問わず初めて徹底的且つ詳細に研究されたものであり、その学問的功績は高く評価されている。

これらは後に柳宗悦(やなぎむねよし)が行った民芸運動に影響を与え、さらに朝鮮における朝鮮工芸美術の再評価にもつながった。近代芸術史において、柳の民芸運動は民衆の工芸品が評価されたという点で重要であり、浅川兄弟の業績はその原点でもある。そしてまた朝鮮と日本の文化交流を考える上でも示唆に富むこれらの事実を芸術学の観点から研究する。

朝鮮による日本への陶磁器の影響は古墳時代から長きに渡り、そのような歴史の中で浅川兄弟は日本人の視点から研究したことで、朝鮮の美を新たに「発見」したといえる。本研究では植民地期において日本が朝鮮工芸美術に視線を向けたという状況を明らかにするために、浅川巧・伯教と柳宗悦を中心に取り上げる。浅川巧は日本においても朝鮮においても、朝鮮の美を「発見」した人物として現在の朝鮮工芸美術研究にも大きく影響を与えたとの記述が多く、現在まで批判が見られない。そこで彼らの朝鮮の美の「発見」過程を追い、また韓国内における評価と当時の朝鮮人の間において工芸品がどのように扱われたのかを調査することで、その位置付けを考察する。

日本と朝鮮との間には、日本による侵略や第二次世界大戦による植民地支配という歴史がある。続く朝鮮戦争を経た南北分断によって、北朝鮮、韓国という異なる国としてそれぞれの道を歩んできたが、日本と朝鮮は歴史を絶えず共有してきた。これらが精算されない過去の歴史として、政治的な面では良いとはいえない状況が現在においても続いているが、文化的に見れば人的、物的な交流の長い歴史があり、互いに大きな影響を与え合い、また受け合ってきた。同じアジアの国として、また隣国として共有してきた過去を見つめ、未来へとつなげていくことが重要だと思っている。

日本、北朝鮮、韓国、これらの三地域が今再び、歴史を歴史として再度認識し、互いに持つべきものを認め、批判し合える関係を構築するために、今回の研究はその一つの試みである。そして、植民地期において朝鮮を理解した人物として知られている浅川兄弟の視点から美術品を考察することで、友好関係において問うべきことを導く研究成果を目標とする。

成果報告書

氏 名 : 安中 茉美

留学先国名 : 韓国

所属機関 : 慶熙大学校国際教育センター、ソウル大学校人文大学考古美術史学科

留学期間 : 2009年3月 ~ 2010年3月

研究テーマ: 植民地期における近代朝鮮工芸史

— 朝鮮民族美術館の設立と浅川巧を中心として —

私は2008年3月から約1年間、松下国際財団の奨学を頂き韓国ソウルにおいて研究を行った。

民芸論を唱えた柳宗悦に大きな影響を与えた浅川巧が、朝鮮においてどのように朝鮮工芸品を評価したのか、また朝鮮工芸品への美意識についての研究を行う中、留学先では特に浅川巧を中心として柳宗悦と共に設立した朝鮮民族美術館の経緯、背景及び蒐集品の行方を追うという研究を主に史料から探ってきた。植民地期の歴史と朝鮮美術史の間に挟まれた朝鮮民族美術館の経緯や朝鮮民族美術館で蒐集した工芸品を明らかにすることで、彼らの美意識、及び工芸に対する視線、植民地政策への提言を明らかにできると考えたからである。

1. 朝鮮民族美術館

浅川巧、柳宗悦が中心となって設立した朝鮮民族美術館は1924年に景福宮(李王朝期に建てられた王宮)の敷地内にある緝敬堂に開館した。終戦後はアメリカ軍政がその価値を認めその所蔵品を民俗学者である宋錫夏の民俗博物館に吸収させた。展示品は古代時代から三国時代、高麗時代、朝鮮時代までの金属類、石材類、木工類、陶磁器類、書画など千点あった。

大韓民国政府が樹立し、その後は朝鮮戦争勃発などの混乱があり、民俗博物館は1950年12月に国立博物館の南山本館に統括吸収された。1951年に釜山に避難し移ったあと、1953年の遷都のときには李承晩大統領の指示によって景福宮内の前博物館に戻らずに再び南山本館に戻った。

1950年末の戦時状況で国立博物館は1955年6月に徳寿宮に移るときまで南山本館を現勤務地とする職員たちが残っていた。その後、国立博物館が徳寿宮に移り民族博物館は建物さえ無くなってしまった。

なお、この民族博物館であるが1960年代中盤期に入って民族博物館設立の必要性が高くなり文化財管理局は1966年10月景福宮の修政殿に韓国美術館を設け、1975年4月にはこれを格下げさせた韓国民俗博物館を現在の場所に建てた。1979年4月に再び国立中央博物館機構に編入され国立民俗博物館として現在に至っている。

2. 朝鮮民族美術館の所蔵品とその後

このように美術館は様々な混乱を経てきたのだが、それと共に蒐集品はどのように移動したのだろうか。朝鮮民族美術館では、浅川巧ら誰が何の工芸品を蒐集し陳列したのだろうか。私は主に文献収集と整理を行い、工芸に関する史料、また新聞などから当時の人々の視線と共に可能な限り実際の美術品を把握することで幻の朝鮮民族美術館の再生を試みた。史料が全て明確にわかっていなかったこともあり、美術館の全ての作品を網羅することは困難であったが、その中で朝鮮総督府が発行した「朝鮮古蹟図譜 第15巻 朝鮮時代陶磁篇」という史料から、朝鮮民族美術館に所蔵されていた64点の作品を確認することができた。

なお、この報告書では作品名などを記述することは避けるが、作品一つ一つの写真と共に(当然白黒写真であるが)所蔵者の名前や作品のサイズなど細かく記載されておりこれは大変貴重な史料であった。ただし、この史料が所蔵してあるソウル大学校の図書館内にある古文献資料室では、持ち出し厳禁でありしかもスキャナーがなかったために、仕方なく史料に掲載されている写真をデジタルカメラで撮影して記録し検証するほかなかった。

さて、その後、朝鮮民族美術館の蒐集品の行方を追ったのだが、上記に記載したように朝鮮民族美術館は国立民族博物館になった。国立民族博物館の所蔵品について言及すれば、所蔵品は1950年12月に「旧民族博物館 所蔵品収入命令書」によって国立博物館遺物管理係によって引き継がれたとある。

この時の遺物は1963年度「国立博物館所蔵品目録」の中の「南山分館蒐集品目録」に記録されていた。この史料をちょうど探しているときに偶然私が所属していたソウル大学考古美術史学科の図書館で発見した。旧民族博物館所蔵品として、金属製品1570点、玉石製品622点、土陶製品1344点、骨角・貝殻品148点、木・竹・草・漆製品466点、皮・毛・紙・織製品230点、書画・拓本162年、武具4点、その他9点など、総4555点は現在国立中央博物館に所蔵されている。

さらに、現在国立中央博物館に所蔵されている中で、明確に「朝鮮民族美術館所蔵」だとわかるものは、7点あることが確認できた。ただしこれらがどこから来たなどという経緯などは明記されていない。

ここでは作品の写真の掲載は省くが、これらの工芸品は現在国立中央博物館に展示されているのではなくあくまで所蔵という形で保管されていた。そのため、実物を見たいと申し出て大学にも協力を求めお願いしたのだが、「修士の学生という身分の方には見せられない」の一点張りでもうにもこうにもできなかつた。結局写真を頂くことができ、検証するのみとなつた。実物を見たかつた私としてはこの点は心残りである。

朝鮮民族美術館の跡地は景福宮の敷地内の緝敬堂であるが、広い敷地内の中では公開されているところと公開されていないところがあり、朝鮮民族美術館のあつた敷地は公開されていない場所であつた。しかし滞在中の2009年に1月にその場所が公開されたので実際に伺い、職員にも話を聞くことができたのは幸いであつた。

3. 工芸品の受容

朝鮮民族美術館の経緯などを探ると同時に、それはどのような位置付けで機能していたのか、という朝鮮民族美術館や当時の美術館の受容、及び当時の人々の美意識や工芸品の受容にも関心を持って研究を進めた。

当時の新聞や雑誌の調査から、誰が何を言っているのか、という作業を試みたが、その中で気になった記事の一つがある。

「やはり柳氏が朝鮮民族美術館という看板の下に朝鮮に残った雑多な美術品以外のものを調べて行くのかそうではないのか、ということ私たちは精神を強く持って見なければいけない。また私たちには柳氏に対して感謝すると同時に自ら反省し恥ずかしさを感じる。」

(1922年10月15日発行 雑誌「東明」)

これらの記事を始めとして明らかなことは、朝鮮内のモノを扱う日本人に対して朝鮮の人々は日本人への「感謝」と同時に、朝鮮の人々が自らのモノを蒐集できないことに対する「反省」の二つの複雑な気持ちを持っているということだ。朝鮮総督府博物館なども含め美術館の設立や目的という観点から見ると、日本人がどのように朝鮮に在るものを扱っていたのかという視線が明らかになる。現在の浅川巧を対象とする研究において「浅川は朝鮮を愛した日本人」という言われ方をされているが、留学先での研究を通してまた美術史的な観点からの研究の意義を改めて感じた。また感情論に終結しない日本と朝鮮半島の在り方について課題を与えてくれたと考える。

4. 調査全体を振り返り

まず一番明らかにしたかった朝鮮民族美術館の設立経緯や背景、そして所蔵品を明らかにできたことは大きな収穫だった。植民地政策や朝鮮総督府に関わる事項から歴史的にアプローチしなければならぬ問題が多くその検証については考察に未熟な点があるにせよ、私に関われる美術史の範囲で美術館の設立を対象として歴史の再構成を行うことができた。また今回は記載できなかったが、ほぼ同時期に設立された朝鮮総督府博物館の設立経緯や背景の史料からも、植民地政策と朝鮮民族美術館以外のその他の美術館にも焦点をあて探っていきたい。

反省点も含めていえば、資料体が最初から明確ではなかったために、1年間という限られた時間でありながら調査は遠回りしたというのが事実だが、しかしそれ故に直接朝鮮民族美術館の設立経緯に関わっていない資料からも、当時の朝鮮工芸品の存在価値や美意識を知ることができた。

またもう一つは、工芸品を身近で触れる機会が多くあったことは朝鮮工芸品の受容を知る上で絶好の機会であった。というのは、いわゆる美術館に展示される美術品と違い、工芸品とは極めて扱いにくいものだと滞在中にも改めて強く感じた。日常的に使われて生活に根づいてきたものだからこそ、工芸品として扱われていながら美術品としても扱われているし、またそうではない部分でもある。雑多なものでありながら、美しいものともいわれる。しかし私は文化を構成する生活感覚が最もよく表れているものが工芸品だと考える。生活であり、文化であり、それが歴史を形成している。そのため、研究自体はそのモノの考察よりは歴史的事実や歴史的背景からのアプローチ

を基礎としていたが、日常的に使用者の工芸品への視線を窺うことから韓国文化と韓国美術の特色を探ることができ、またそれらの経験は工芸品の把握や分類に関しても大いに意義のあったことだと思う。

余談であるが、例えばチムチルバンと呼ばれるサウナに行き、たまたま隣にいた見知らぬおばさんと話が盛り上がり「うちにも膳があつてねえ・・・」と使用者自らの声を聞くことができ、友人の家に遊びに行きその家の歴史に触れることもあった。安東(アンドン)という未だに両班(ヤンバン)階級の子孫が多く住む地域に行き知り合いの紹介で寝泊まりさせて頂いた際には、代々伝わる両班の文化と生活について直接知ることができた。これらは直接的な研究ではないにしろ、日本にいれば絶対に知ることのなかった貴重な声を拾うことができた。

そのほか、「工芸」と聞けば地方の美術館に行くなどして、1年間ほとんどの時間を知らなかった工芸品の知識をインプットすることができた。これらがなければ朝鮮工芸に関して資料のほとんどない日本で研究対象を理解することは難しかったであろう。今後は留学中の調査と収集した資料を基に修士論文を完成させたい。

《留学全般の感想》

私は実際の滞在期間は1年であったが、最初の半年は慶熙(キョンヒ)大学校国際教育センターに所属し韓国語を学ぶことを前提として勉強し、残りの半年はソウル大学校人文大学考古美術史学科に所属した。最初の半年は、毎日韓国語を学ぶ授業に参加したあと、国立国会図書館に通っていたのだが、韓国語の授業の予習復習と史料収集の両立に加え、国会図書館までの距離が片道1時間以上かかり遠かったために少々大変であった。また調査方法にかなり戸惑い国会図書館の職員さんには随分お世話になった。すんなりとはいかず四苦八苦していたことが思い出される。しかし結局ソウル大学校に所属先を移動したときにその時の蓄積を活かすことができたので、結果的に最初の半年の苦労はしてよかったのだと思う。さらに前半の半年で韓国語も大きく上達できた。

また、3月に渡航してからストレスやホームシックにかかったことはほとんどなく、楽しく生活していたのだが、だんだん暑くなるソウルの気候や人の多さのせいなのか、または水のせいなのか(?)本来健康な私も体調面では辛かった。最初の半年は顎関節症や胃痛に苛まれ、毎週病院に通っていた。顎関節症の方は毎回の電気マッサージやマウスピースを作り半年ほど治療をした。恥ずかしい話だが、最初の一カ月は病院に行き泣きながら症状を説明していた。痛くて泣いているのではなく、本当に自分の言葉が通じているのか、どんな治療がされるのか、というわけのわからない不安に襲われ気がついたら毎回涙がでていた。しかも大学病院であったため、研修医の方数名が毎回こぞって私の横で見学しているのも不安を増大させた。(それから、この時保険は絶対に入っておくべきだと本当に強く感じた。)しかしこれら病院通いの経験から、主張すべき時に主張する韓国語力とタフさ(?)は養われたのではないかと思う。

9月にソウル大学校に移ってからは、韓国美術史などの授業も履修した。そこで発表をし、レポ

ートを提出する機会もあり、大変ではあったが非常に有益な経験であった。授業で知り合った人と仲良くなり、多くの友人にも恵まれた。授業が終わると皆、自然と一緒に図書館に向かい各自勉学に励むというように勉強熱心で、私も良い刺激を頂いた。

住居はソウル大学校に移動した際に引っ越しをしたのだが、どちらとも下宿で過ごした。管理人のおばさん(アジュンマと呼ぶ)がいて、食事を提供してくれるという住居スタイルである。私の留学生活はなんといっても下宿のアジュンマ、そして共に過ごした下宿の友人がいてこそあるものだった。いつも私たちを気遣ってくれ喜怒哀楽を共にしてくれたアジュンマと友人の温かさ。辛いことがあり家に帰ったときには、私が何を言わなくても「何かあったのか？」と察してくれたアジュンマ。ご飯を食べながら色々な話をしてくれた友人。彼らのお陰で私の毎日をさらに楽しいものにしてくれた。

もちろん、もともとの知り合いである多くの友人にもいつも支えてもらった。楽しいときも辛いときも一緒にいてくれた友人に感謝してもしきれない。そして好奇心旺盛な私は彼らに「韓国人より韓国に詳しい」と(もちろん冗談で)言われることがあったが、友人を巻き込んで多くの文化経験に触れる機会を頂きとても恵まれていた。このように、人に恵まれた私の留学生活は「縁と感謝」の一言に尽きるといえる。

.....

最後になりましたが、これら充実した留学生活を送ることができたのは、何といっても松下国際財団の方々のお陰です。まだまだ未熟な私を奨学して頂いたことに改めて感謝申し上げます。財団の方々のご支援がなければ私の留学生活も、貴重な経験もなかったであろうと思います。私はこの1年間の留学生活を通して学んだことを土台として、さらに韓国文化への関心を深め勉強していきたいと思っています。ありがとうございました。